

米国巡回少女マンガ展示会：
 ヴィジュアルカルチャーと美術教育
 徳 雅美

カリフォルニア州立大学チーコ校

昨年10月から北カリフォルニアのチコの街を皮切りに全米を西から東へと横断する形で米国巡回少女マンガ展示会「Shojo Manga! Girl Power!: What can shojo manga tell you? (少女マンガ! 少女の力! : 少女マンガは何を語るか?)」を開催している¹⁾。なぜ今米国で「少女マンガ展」なのか? 開催へのいきさつと美術教育との関連性についてこの場を借りて紹介させていただきたい。

米国のマンガ事情

日本の「漫画□まんが□マンガ」から世界のMANGAになったと言われて久しい。1980年代アジアでの海賊版の隆盛からヨーロッパへ、そして21世紀初頭現在、米国市場においてすら、日本のマンガが元ネタであると明らかにわかる商品であふれている。またマンガ関連の展示会も盛んである²⁾。しかし、日本のマンガが近代マンガとして発展してきた歴史的背景、特徴、そして社会における影響等についてその価値が正しく認識されているかどうかは、かなり疑問である。そこで、日本近代マンガの大きな特徴のひとつである「少女マンガ」に焦点を当てた展示会を開催することにより、他のコミック(例えばアメリカンコ

ミック)と異なる日本マンガの特異性とその価値を広く紹介したいと考えるようになった。
少女マンガ展示会概要と背景

少女マンガとは何ぞや。少年マンガとどう違うのか。ジェンダーによって日本のマンガはなぜこれほど分化発達したのか、また単純に、どうして少女マンガの人物は過剰にデフォルメされているのか等々。我々日本人が日頃あまり意識する事なく、日常の中で受け止めているマンガ表現について、疑問に思う米国人は少なくない。これらの問いに答えるべく、近代少女マンガの発展として、戦後から現代までの約60年、その発展に貢献のあった23人の作家(手塚治虫からよしながふみまで)作品2百点(原画、複製原画)を作家のプロフィール(経歴、作品哲学等)と共に展示することとした³⁾。幸いにも国際交流基金の助成金を受け、2005年から2006年にかけて米国4都市の大学関連展示会場で巡回展示会として開催されることが可能になった。一般の公共美術館ではなく、大学関係施設での公開にした理由は、米国の大学ギャラリー(美術館)は広く一般に無料で解放され、教育普及に力を入れているのが常だからである。そういった美術教育環境の中で、マンガに興味がなかった人たちにも足を運んでもらい、その価値を知ってもらうこと、また美術に限らず他分野の授業(例えばメディア学、比較文化学、ジェンダースタディ、アジア学等)の中でこの展示を取り上げてもらうことによって、マンガを多角的に読み取ってもらうことを期待したからである。

こどもの描画発達とマンガの影響

さて、そもそもなぜ一大学教員に過ぎない私がマンガ展示会を開催するに至ったのか。そのことを不思議に思う人も多いらしく、同様の質問を何度か受け取った。理由はいろいろあるが、そのきっかけは10年程前に遡る。当時「日米のこどもの描画比較研究」に取り組んでいたが、その結果から美術教育学において、一般的に言及されている「こどもの描画発達の普遍性の理論⁴」に異議を唱えることになった。その根拠となったのが、他国のこどもたちの描画には見られない、日本人のこどもの描画上にのみ顕著に現われるマンガの影響である。それは単に人物表現のみならず、空間の表現方法に、その顕著な差が見られた。描画の発達理論における文化的特異性の問題、またこどもの描画に影響を与える美意識の発達という観点から、日本のこどもたちの描画に最も影響を与えたマンガに興味を持ち、他のメディア媒体（例えばアニメや米国のコミックなど）と比較しながらマンガの特異性とは何なのか、を研究していくことになった。我々を取り巻くこの世界に多くのメディアが存在する中でなぜマンガなのか、またマンガの影響とはこういった形でこどもたちの描画にそして認知の発達課程で現われるのか等々興味はつきない。結果、かつて少女マンガの読み手の一人に過ぎなかった私が、マンガの世界に深く拘わることになり、米国においてまだ評価されるに至っていない、少女マンガの価値と少女マンガ家の貢献を紹介したいと考えるようになったのである。

米国巡回少女マンガ展の反響

それでは結果、巡回地での反響とその成果はどうだったのか。この展示会を構想しはじめた2003年には「少女マンガ (Shojo Manga)」という言葉を知っている米国人はほとんどいなかったが、2004年(12・28)から2005年(9・18)にかけてニューヨークタイムズで大々的に少女マンガとその経済効果が紹介されたのと時期を同じくして、展示会を開催することができたことは幸運だった。各地で多くのメディアに取り上げてもらい、話題性においては一般の関心を惹く事ができたようである。

少女マンガは少女(女性)の願望を映す鏡であるといわれる。過去60年にわたる少女マンガの主題の変化を追う事により、日本女性の社会での役割の変化、そして作質作風から日本人の美意識を少しでも読み取ってくれることを期待して開始した展示会であるが、新聞等の批評文また展示会場での反応を直接見る限りにおいては、その価値が徐々に認知されているのを感じる⁵。

現在、米国美術教育の中でヴィジュアルポップカルチャー(視覚大衆文化)が話題になっている。が、この展示会は日本においてその大衆文化の求心的存在であり、社会現象となったマンガ(少女マンガ)を題材に、そこに内在する問題を読み取り、さらには米国社会におけるヴィジュアルカルチャーの行方を推測する、日本発信の美術教育プロジェクトの役割も担っている。日本のマンガを鏡として米国社会自身もまたヴィジュアルカルチャー

一の強大な影響の中に常に晒されているのだ
ということ再認識してくれたらと願っている。

註1) と5) 少女マンガ展サイト (日英語掲載) 参

照: <<http://www.csuchico.edu/~mtoku/vc>>

註2) 例えば、ニューヨークでは昨年MoMA (ニュー
ヨーク近代美術館) で宮崎駿監督アニメ作品の回顧上
映会に引き続き、日本の戦後50年間のアニメ映画の連
続上映会が行われた。日本のコンテンツ産業が当地の
企業に下請けさせる形で、アニメ、ゲーム、漫画など
のプロモーションを兼ねた無料イベントは毎月のよう
に行われている。また日本の漫画を多角的に紹介する
動きも出てきており、「性の歴史」をテーマとする
Museum of Sex <<http://www.museumofsex.org/>> で
は、日本の春画から漫画に至るポルノグラフィの歴史
に関する特別展を5月現在開催中である。(国際交
流基金ニューヨークの松本氏より情報提供)

註3) 構成内容は下記の3つに焦点をおいた: 1) 主
題の変化、2) 少女像女性像の変化、3) 少女漫画特
有の漫画文法(構成方法)の特徴。また23人の作家
を以下の3時代に分類: 1) 第一世代(戦後~60年
代): 近代少女マンガの曙、2) 第二世代(60~80年
代): 近代少女マンガの発展、そして3) 第三世代
(80年代~現代): 近代少女マンガ次世代へ

註4) ピアジェに影響を受けたローフェンフェルドら
が提唱する発達段階説もこれに属する。描画表現の発
達はこどもの属する文化や社会環境の違い、もしくは
ジェンダーの差に左右されずに低次元から高次元へと
直線(Linear Progression)的に発達するというもの。